

2017.3

（公社）富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

3 号

第39巻
No.332



イチハツ *Iris tectorum* Maxim.

（アヤメ科 *Iridaceae*）

生 薬 エンピコン（鳶尾根） 秋に葉が黄変する頃掘り上げ、根を除き、水洗後陽乾する。

成 分 イソフラボノイド配糖体：tectoridin, iristectorinA・B, tectoruside 等。

効 能 下剤、催吐剤。解毒、活血、利水薬として消化不良、水腫、打ち身に用いる。



生薬 イチハツ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国中央・南西部、ミャンマー北部に自生するアヤメ属 (*Iris*) の多年生草本です。日本にはいつ頃渡来したかは定かではありませんが、『本草和名』(918)に「鳶尾、一名烏国子、一名烏菌、一名烏固、和名古也須久佐(こやすぐさ)」と記され、また『和名抄』(931-937)には「鳶尾 本草に云う、鳶尾一名烏園、和名古也須久佐」と和名が記されていることから10世紀には渡来していたのではないかと推測されています。イチハツの名で呼ばれたのは『御湯殿上日記』(1563)に「飛鳥井より一八参る」とあるのが最初の記載で、以降『花壇綱目』(1681)に「一八草」、『花壇地錦抄』(1695)には「一八、春末夏初、一初共いう」とあり、『大和本草』(1709)に「紫羅傘(いちハツ) 又鳶尾と云う」とあり、『和漢三才』(1713)にも「根を鳶頭と名づく。和名古也須久佐。俗に伊知波豆(いちハツ)と云う」、さらに『倭訓栞』(1830-1843)には「いちハツ 鳶尾草也といえり。最初(いちハツ)の義。此の花の種類最も多し。それが中に早く花咲くもの也。春末に花を開くと云えば、かきつばた(*I. lae vigata*)の類にしては早き方なり」とアヤメの仲間では最も早く咲くところから名付けられたと述べています。

草丈は30~50cm、葉は2列で互生し、剣状で長さは約30~45cmで他のアヤメ属植物より低く、葉の長さも短い、葉の幅は3~4cmと広い。茎は1~2分枝し、3~5花をつけ、青紫色の花は径10cmくらい、3枚の外花被片はほぼ円形で、縁がやや縮れており、濃紫色の脈や斑点、中央に白色の鶏冠状突起があるのが特徴です。3枚の内花被片は比較的小さく、平開します。根茎は太く、分枝し、薬用に利用されます。『大和本草』に「その根、即ち鳶頭、また薬に入る」と記され、江戸時代になって薬としての利用が始まったようです。『千金方薬註』(1778)にも「疣を落とすに此の実一粒を吞む、即ち落つ」と書かれています。

『大和本草』に「民家の茅屋の棟にイチハツを植えて、大風の防ぎとす。風、薨(いらか)を破らず」と江戸中期の日本の風景の中の茅葺屋根の上にイチハツが植えられていたことが記録されています。屋根の上に青紫の花を咲かせていたことをスコットランドの植物学者ロバート・フォーチュン(1812-1880)が『江戸と北京』(1863)の旅行記の中で、神奈川の宿場風景を「屋根は寺のような草ぶき屋根であったが、その屋根の背に、ほとんど例外なく、イチハツが生えていたのは、いかにも田舎の面白い眺めだった」と描写しています。強風を防ぎ、火災から家を守るために屋根の背に植えられたと伝えられていますが、効果があったかどうかはわかりません。フォーチュンの報告は今でも種小名 *tectorum* (屋根の)に残っていますし、英名の Roof (屋根) *Iris* の語源となっています。

中国名の鳶尾は李時珍(1518-1593)によると「いづれもその形状に対して命名したもので、烏園は烏鳶と書くが正しい」と述べています。原産地の中国での利用は古く、『神農本草経』に「鳶尾。味苦平。山野に生ず。蟲毒、邪氣、鬼注、諸毒。癰瘕(ちようか)、積聚を破り、水を去り、三蟲を下す」と記されています。『名医別録』(502-536)には「烏鳶は九疑の山谷に生ずる。五月に採取する」、『新修本草』(659)には「この草は所在にあって、一般民家でも栽培する。葉は射干に似て広く長く、長い茎は突き出ない。花は紫碧色だ。根は高良薑(*Alpinia officinarum*)に似て、皮が黄で肉が白く、噛めば咽喉を刺激する。射干(ヒオウギ *Belamcanda chinensis*?)は、花が紅く、茎が突き出て長く、根は黄にして白がある」と射干の特徴がヒオウギと一致することや園芸品として一般に栽培されていたことが記されています。さらに『蜀本草』(934-965)には「草を鳶尾と名づける。根を鳶頭と名づけ、また鳶根ともいう。葉は射干に似て地に布いて生え、根は黒く、高良薑に似て節が大きく、数個相連なっている。九月、十月に根を採って日光で乾す」と採取時期、調製法が書かれています。